

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

VIVO

11

NOVEMBER 2005

CONTENTS

水戸室内管弦楽団第63回定期演奏会1、2
水戸室内管弦楽団第64回定期演奏会3、4
最近の公演から4
ネタマ5
インフォメーション6



写真上;水戸室内管弦楽団

写真下・左から;榎本大進、宮本文昭、ブルーノ・レオナルド・ゲルバー、ライナー・クスマウル

DAISHIN&MCO、皆様から待たれていた出会いがついに実現します。 11 / 5(土) 6(日)水戸室内管弦楽団第63回定期演奏会

水戸室内管弦楽団(MCO)はこれまで、数多くの世界的な指揮者や演奏家をゲストに迎えてきました。その多くは、すでに長くキャリアを積んだ、功なり遂げた名演奏家たちでした。ムスティラフ・フロストロポーヴィチ、アンドラーシュ・シフ、シモン・ゴールドベルク、ブルーノ・レオナルド・ゲルバー、ドリス・ゾッフェル、ルドルフ・バルシャイ、カール・ライスター、ナタリー・シュトゥッツマン、トレヴァー・ピノック、オリ・ムストネン、マリーサ・タンツィーニ、トン・コープマン等々…。しかしその一方でMCOは、「昇り竜」の勢いにある若いスターとも、彼らの新鮮なエネルギーとのふれあいを楽しむかのように、共演を重ねています。すでに2度共演しているヴァイオリニストのミリヤム・コンツェンや、(もう十分にヴェテランですが、共演した指揮者の中では若い)広上淳一や準・メルクルらのことが、まず思い出されるでしょう。

そして第63回定期演奏会、世界を駆ける駿馬が、MCOと初めて共演します。ヴァイオリニスト・榎本大進。26歳という若さですが、彼のキャリアはすでに輝かしいものです。フリッツ・クライスラー国際音楽コンクール(96年)、ロン＝ティボー国際音楽コンクール(96年)をはじめ、パッハ・ジュニア・コンクール(90年)、メニューイン国際ヴァイオリ

ン・コンクール(93年)、ケルン国際ヴァイオリン・コンクール(94年)など数々の権威ある国際コンクールを制覇。中でも、96年のロン＝ティボー国際音楽コンクールでは、史上最年少の17歳での優勝(当時)を果たすという快挙を成し遂げました。

しかし、その華やかな栄誉の一方で、榎本大進の音楽を見つめるまなざしは、いささかも揺れない、確かなもののように感じられます。ドイツに住み、日本でのリサイタルは3年に一度。ときに勉強のために、演奏活動が過度になることを抑制し、CDのリリースも決して多くはなく、「音楽はいつまでも勉強ですから」と語る。コマーシャルイズムに溺れることなく、その目はただ音楽だけを見つめています。それは、優れた師との出会いも影響しているかもしれません。MCOでいつも透徹した演奏を聴かせる田中直子。ヴェンゲーロフやレーピンら一流のヴァイオリニストを数多く育てた名教師ザハール・ブロン。そしてゲスト・コンサートマスターとしてMCOと何度も共演し、深い知性と洞察力に満ちた演奏を聴かせてくれているライナー・クスマウル。この3人の師の存在から、榎本大進の音楽のベースとなっているものの確かさと深さがうかがえます。持ち前の美しい音に、曲の内奥に分け入ろうとする厳しい姿勢を託し、聴衆にたしかな手ご

たえを残してくれるその演奏。MCOとの共演という水戸芸術館でしかありえなかった形で、私たちはその演奏にはじめて出会うことができるのです。

今回の初共演にあたって榎本大進から提案された作品は、パッハのオーボエとヴァイオリンのための協奏曲 二短調 およびメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲 二短調。ヴィルトゥオーソ的なショウ・ピースでなく、音楽性の豊かさこそが問われるこれらの作品を選んだことに、近年は古典作品の演奏に情熱を傾けているという榎本大進の決意を感じることができます。また、少年時代から共演を待ち望んでいたという、MCOメンバー・オーボエの宮本文昭との共演も、大いに楽しみます。

さて私たちは、榎本大進へのEメールインタビューを行いました。以下ご覧いただき、この駿馬とMCOとの出会いへの期待を高めていただければ、と思います。

榎本大進インタビュー

Q1:榎本さんをMCOのゲストとして初めてお迎えでき、嬉しく思います。榎本さんは、MCOの第1回ヨーロッパ・ツアー(1998年)の際、ハンブル



写真左;榎本大進
写真右;1995年第23回定期演奏会
(指揮:ルドルフ・バルシャイ)より

ク・ムジークハレ大ホールにおける演奏会のリハーサルに訪れ、水戸室内管弦楽団の演奏をお聞きになられています。その際、MCOからどんな印象を受けられましたか。

A1:はい。ハンブルクのムジークハレ大ホールでのリハーサルを聴かせていただきました。母と一緒にだったのですが、ホール内で聴いていたのは僕たち2人だけで、まるで自分たちのためにオーケストラが演奏してくれているような気がした事を覚えています。今でもよく思い出のですが、その時聴いたオーケストラの繊細な音には、とても驚きました。オーケストラの音を満喫し、とても楽しませていただきました。本当にすばしかったです!指揮されていたのは小澤征爾さんで、それがマエストロとの、最初の出会いの一つでした。それに、以前師事した田中直子先生や、ジュリアード音楽院の頃から知っている川崎雅夫先生に久しぶりにお会いできて、大変幸せだったことも覚えています。

Q2:榎本さんはお子さんの頃ニューヨークで、MCOのメンバーであるヴァイオリニスト、田中直子さんに師事されています。田中さんは、榎本さんにとってどんな先生でしたか。

A2:田中先生は素晴らしい教師です。いつもどうやって僕を力づけ、助けることができるかご存知です。今でも、先生の励ましやご支援を感じることができます。先生のレッスンはいつも大変面白く、それに先生はとてもチャーミングな方ですので、レッスンに何うのが大好きでした。先生は、決して怒ることはありませんでしたが、どうやったら僕に練習させることができるかきちんとご存知でした。先生のおかげで、僕は音楽に恋をし、音楽の持つ力を教わりました。先生には本当に感謝しております。

Q3:今回は残念ながら榎本さんとの共演ではないのですが、次のMCOの演奏会(第64回定期演奏会)には、これも榎本さんの先生であるライナー・クスマウルさんがゲスト・コンサートマスターとして出演されます。クスマウルさんから、榎本さんほどのような影響を受けられましたか。

A3:クスマウル先生は、ヴァイオリニストがプロとしてできる、ほとんどすべての事をされてきた方です。ベルリン・フィルのコンサートマスターを務め

られ、もう長い間偉大な教師として教えられ、知る限りにおいて世界有数の室内楽奏者であり、すばらしいソリストです。したがって、音楽に対する様々な異なるアプローチをご存知です。実際の演奏会では用いなかったとしても、解釈の数多くの可能性を知っておくことはとても貴重です。何度演奏した作品でも、ユニークで興味深いものにしてくれますし。僕は先生の経験がうらやましいです。師事している間に、先生の音楽の理解を少しでも盗み出すことができているのなら、よいのですが。先生とMCOとの演奏会を聴くことができず、とても残念です。

Q4:今回の演奏曲目についてお聞きします。バッハのオーボエとヴァイオリンのための協奏曲は、MCOのメンバー、宮本文昭さんとの共演ですね。榎本さんはお子さんの頃から、宮本さんと共演されるのが夢だったそうですが、宮本さんについての印象、また初共演にあたってのお気持ちなどをお聞かせください。

A4:宮本文昭さんと最初に同じ舞台上で演奏したのは、宮本さんがまだケルン放送交響楽団のソロ・オーボエ奏者だったときです。宮本さんと一緒に演奏した後で、真っ先に考えたのは、このバッハのオーボエとヴァイオリンのための協奏曲のことでした。この作品は以前から知っていて、宮本さんと演奏することができたら、信じられないほど素晴らしい体験になるだろうと確信しました。その時、母親からは、もし僕が一生涯懸命ががんばってれば、多分いつかは宮本さんと共演できるようになる、と言われました。母親というものはいつも、どうやって子供達に勉強させるかよく知っていますね!ただ、残念なことに、この信じられないほど美しい傑作をついに宮本さんと一緒に演奏できるようになるのに、今まで時間がかかりました。でも、今となってはここまで時間が経ったことが嬉しいです。MCOという素晴らしいオーケストラと共に、それを実現できるからです!

Q5:もう1曲のメンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 二短調は、有名なホ短調の曲ではなく、若い頃に書かれた「知られざる傑作」ですね。この曲を選ばれた理由についてお聞かせください。この曲は、榎本さんがたいへん尊敬されている20世紀の名ヴァイオリニスト、ユーディ・メニューインが「再発見」し復活初演した曲ですが、そのこととも関係があるのでしょうか。

Q5:この協奏曲では、メンデルスゾーンの天賦の才能をはっきりと聴くことができると思います。もちろん、後の作品ほどまとまっていませんが、この作品は様々なアイデアに満ち、メンデルスゾーンがどれだけこの協奏曲の作曲に全てのエネルギーを注ぎ込もうと願っていたかを、感じることができます。ユーディ・メニューイン卿がこの作品を発見したことは、もちろんこの協奏曲に興味を持った理由の一つです。メンデルスゾーンがこの宝物を作曲した時は13歳(!)で、今の僕はその2倍の年齢ですが、解釈にその無垢で純粋な美しさを注ぎこむことができたら、と思います。この作品を最初に学んだのはニューヨークで田中直子先生に師事している時でした。ですから、この作品をMCOと演奏することは、ますます挑戦しがいのあることなのです!

Q6:最後に、初めて水戸芸術館コンサートホールATMに登場されるにあたり、水戸の聴衆にメッセージをお願いします。

A6:MCOとのプログラムは今まで日本で演奏してきた中で、もっともおもしろい内容になっていると思います。このすばらしいオーケストラと比類ない宮本さんと共に、水戸のお客様に満足していただけるような演奏にしたいと思います。(以上、Eメールによるインタビュー。協力:ジャパン・アーツ)

15歳の頃、メンデルスゾーンの ヴァイオリン協奏曲ホ短調の独奏者として同響と共演。

*

さて、第63回定期演奏会において演奏されるもう1曲、ショスタコーヴィチ(バルシャイ編曲)の弦楽器と木管楽器のための交響曲にもぜひ触れておきたいと思います。これは、ショスタコーヴィチと生前深い交流があった名指揮者ルドルフ・バルシャイが、その弦楽四重奏曲第3番を、作曲者の篤い信頼のもと、編曲した作品です。10年前の1995年、そのバルシャイがMCOを指揮して繰り広げたこの曲の名演は、CDにもなっていますのでご記憶の方も多いでしょう。終楽章では、ホールの空気がなにか霊的な力に支配されているかのような、恐ろしいほどの感動が聴衆を支配していました。あの名演から10年、バルシャイ直伝のショスタコーヴィチを、今度はMCOが自らの手で奏できます。10年の月日がMCOにどんな成熟をもたらしたか、どうぞご期待ください! 《矢澤》



写真左;ブルーノ・レオナルド・ゲルバー
写真右;1996年第25回定期演奏会より

ゲルバー、クスマウル、MCOの顔合わせによる贅沢なベートーヴェン・プログラム 11 / 19(土) 20(日)水戸室内管弦楽団第64回定期演奏会

ピアノの巨人、ゲルバー登場

ブルーノ・レオナルド・ゲルバーと水戸芸術館および水戸室内管弦楽団(MCO)は深い絆で結ばれています。ゲルバーは、1992年5月にリサイタル(ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ 二短調 作品31の2 テンペスト、ソナタ イ長調 作品101、ブラームス:3つの間奏曲 作品117、ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ 作品24)、94年5月にMCOと共演(モーツァルト:ピアノ協奏曲 変ホ長調 K.271 ジュノーム、同 二長調 K.537 戴冠式)96年6月にMCOと再共演(モーツァルト:ピアノ協奏曲 二短調 K.466)と、すでに水戸芸術館のステージに3回登場しています。そのすべてが忘れがたい名演として語り草になっているほどです。MCOメンバーとの友情、信頼関係も格別に篤いものがあります。

このたび、9年ぶりの登場となるゲルバー氏のインタビューを、まずはじっくりとご覧ください。

*

Q1:マエストロ・ゲルバー、再び水戸室内管弦楽団にお招きできますことを大変光栄に思います。今回の演奏会に向けての率直なお気持ちを、まずお聞かせください。

ゲルバー:この度、9年ぶりに水戸に伺えることを大変嬉しく思います。水戸の素晴らしいホールとオーケストラとお客様に再会できると本当に楽しみです。今からすでに、今回の演奏会がとても良いものになると確信しています。水戸では私が自信を持って演奏に臨めます。実際、このように自信を持って演奏できる環境はどこでもあるわけではありませんから、水戸は特別な場所です。

Q2:マエストロ・ゲルバーは、1992年5月にリサイタル、1994年5月と1996年6月には水戸室内管弦楽団との共演で水戸にいらしています。水戸芸術館というホール、水戸室内管弦楽団というオーケストラに対する印象をそれぞれお聞かせください。

ゲルバー:水戸芸術館は信じがたいほど美しく、不思議な魅力を持つホールです。また音響の素晴らしさは奇跡のようです。ですから音楽家にとっては、

水戸芸術館のステージに立てるということは夢のようなことだと思います。こちらのホールで、水戸室内管弦楽団と演奏できることは大変名誉なことですし、今回の演奏会が私の今シーズンのハイライトになることは間違いありません。

Q3:今回のプログラム(ベートーヴェンの協奏曲第3番と第5番 皇帝)について、コメントをお願いします。

ゲルバー:ベートーヴェンは私の人生の作曲家と言えます。ベートーヴェンなしに私の音楽家としての人生は語れません。10歳のとき、初めてベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番を、15歳のときに第5番を演奏しました。第3番は、私が公のステージで演奏した一番最初の協奏曲です。当時私は1年半もこの曲を練習し、この長い練習のあと、ヴィンセント・スカラムツァ先生はようやくこの曲をステージで弾くことを認めてくれました。ベートーヴェンのピアノ協奏曲は、5曲とも私の人生そのものです。

Q4:今回も指揮者なしの演奏会ですが、ゲスト・コンサートマスターとして、ベルリン・フィルの元コンサートマスター、ライナー・クスマウル氏を招いています。クスマウル氏との共演についてはいかがですか。

ゲルバー:今回の水戸での演奏会が、クスマウル氏との初共演になります。今まで一度も共演したことがありませんので個人的には存じ上げませんが、彼の素晴らしい評判は何ついています。クスマウル氏がベルリン・フィルのコンサートマスターだった頃からの評判はもちろん、今日のベルリン・パロック・ゾリステンのリーダーとしての好評も存じています。彼のソリストとしての実力や指導者としての活動も素晴らしいと思います。今回、一個人としても素晴らしい人格をお持ちのクスマウル氏と共演できるのをとても楽しみにしています。

Q5:最後に、水戸の聴衆に向けてメッセージをお願いします。

ゲルバー:この度、私のもっとも好きな作曲家であるベートーヴェンを水戸芸術館で演奏できることを嬉しく思います。この信じがたいくらい素晴らしく個性的な空間と音響を持つホールで、水戸のお客様と音楽を共有できることを心から楽しみにしております。

(協力:梶本音楽事務所)

*

ゲルバーのベートーヴェン

先述のように、ゲルバーは、MCOとの共演で、これまでにモーツァルトのピアノ協奏曲3曲を弾き振りしてきました。その演奏は、古典的な端正さとゆるぎない音楽の骨格という土台の上に、ゲルバーの光り輝くようなピアノの音色が天才モーツァルトの抒情を紡ぎ出す、といった趣を持つものでした。

しかし、ゲルバーであるならばベートーヴェンも聴きたいと思うのが、音楽ファンの本音ではないでしょうか。ゲルバーのベートーヴェンは、やはり古典的な端正さと堅牢な構築性を基本としながらも、そこにデモーニッシュな感情のほとばしりが聴こえ、迫真の力をともなって、聴くものの心をとらえます。それは、ゲルバーの演奏が頭と技術で計算され尽くした類のものではなく、音楽に全身全霊を注いだ結果、内面から純粋に湧き出たものであるからこそその迫力なのだと感じられます。

ゲルバーは7歳のとき、重い小児麻痺をわずらい、1年間まったく寝たきりの生活を強いられました。しかし、ゲルバーにとって、音楽はすでに身体の一部ようになっていたため、ピアノの下にベッドを持ち込み、寝たままでも鍵盤を弾けるように、ピアノを解体してまで練習したと伝えられます。この音楽に対する深い愛情と不屈の精神力は、今日のゲルバーの演奏芸術の源であり、またベートーヴェンの音楽の本質とも密接につながって行くものではないでしょうか。

今回、私たちはゲルバーにベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番 皇帝 をリクエストしました。それを快く承諾してくれたゲルバーが選んだもう1曲が、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番八短調作品37です。同じベートーヴェンのピアノ協奏曲でも、ハイドンやモーツァルトといった先人たちの



写真; 2003年第56回定期演奏会より

影響が色濃く残る第1番や第2番ではなく、中期の独創的な傑作群を予感させる、悲愴感漂う第3番を選ぶあたり、いかにもゲルバーらしいと言えるのではないだろうか。

「ベートーヴェンのピアノ協奏曲は、5曲とも私の人生そのもの」と語るゲルバーの演奏は、聴き流して楽しむ類のものではありません。彼の真摯な演奏をしっかりと受け止めるために、聴く側も心と身体の準備を万端にしてのぞみたいものです。

クスマウルがゲスト・コンサートマスター

ゲルバーとMCOががっぷり四つでベートーヴェンの音楽と対峙するにあたり、コンサートマスターとして白羽の矢を立てたのがライナー・クスマウルです。指揮者クラウディオ・アッパードの勧誘に応じ、1993年から98年までベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターを務め、現在はベルリン・パロック・ソリステンでの活動や後進の教育に力を注ぐ名ヴァイオリニストです(11月前半の第63回定期演奏会に登場するヴァイオリンの

榎本大進は、クスマウルの弟子に当たります)。

クスマウルもMCOには4度目の登場となります。MCOの腕っこき奏者たちも、クスマウルのリーダーシップには全幅の信頼を置いています。2001年11月、第47回定期演奏会でのメンデルスゾーン:交響曲第3番 スコットランド や、03年11月、第56回定期演奏会でのモーツァルト: ハフナー・セレナード などの名演は、いまだに耳を離れません。

クスマウルがコンサートマスターの席に座ると、MCOがその活動の柱の一つとしている、各奏者が自発性を存分に発揮する「指揮者なし」のアンサンブルの楽しさに、重心の低い、がっしりとした安定感が加わります。それは、ドイツ・オーストリア音楽の演奏の伝統とかかわりがありそうです。クスマウルがコンサートマスターとしてMCOのメンバーと一緒に呼吸しだすと、各奏者のみずみずしい自発性はそのままに、いつの間にか、クスマウル自身がその中で育ってきたドイツ・オーストリア音楽の伝統的な演奏、すなわち奇をてらわない正

攻法の演奏が展開されていきます。その演奏は、クスマウルの解釈云々ではなく、クスマウルがMCOと一体となって生み出す楽興の時として、聴く者の心に迫ってくるのです。とにかく、鳴り響く音楽の伸びやかさと充実感は比類がありません。今回、演奏会の冒頭を飾る エグモント序曲 でも、存分に感じていただけることでしょう。

ゲルバーのインタビューにもあるとおり、ゲルバーとクスマウルは初顔合わせとなります。しかし、ベートーヴェンのピアノ協奏曲を聴くにあたって、ゲルバーとクスマウルとMCOほど、強力でふさわしい組み合わせもないのではないかと私たちは確信しています。ちなみに、ベートーヴェンのピアノ協奏曲が水戸芸術館コンサートホールATMで演奏されるのも今回が初めてですが、記念すべき演奏会となること間違いありません。

どうかこの充実のベートーヴェン・プログラムをお聴き逃さないように!

《閑根》

最近の公演から SEPTEMBER



1



2



3

ミト・デラルコ第8回演奏会(9月11日)

ミト・デラルコ、初のロマン派への挑戦はシューベルト。3年ぶりに取り上げるポツケリーニ作品は有名な「メヌエット」を含む弦楽五重奏曲。そして新メンバーとなってから初のゲスト、エマニュエル・バルサのチェロとの共演。盛りだくさんの第8回演奏会、いかがでしたでしょうか。ゆるやかな空気が流れるポツケリーニの音楽と、心の深部にどこまでも下りてゆくシューベルトの五重奏曲。異なる世界を旅した演奏者とお客様は、終演後「心地よい疲労感」とでもいべき満ち足りた表情を共有していたように思います。それは8日の山口公演(山口南総合センター)でも同様に感じられたことでした。アンコールはポツケリーニ 羊飼いと狩人。《矢澤》アンケートから これまでミト・デラルコの演奏会をさぼってしまった事を深く反省しております(千葉市:Y.U.さん) これはもはや21世紀後半の感性的シューベルトであった。シューベルトがシェーンベルクの前駆者であることを古楽器で示したとも言える以上に、極めて新しい音楽だった。ミト・デラルコは水戸芸術館の恐るべき秘密兵器(筑西市:K.K.さん) すごく温かい(福島県富岡町:H.F.さん)

ソング・シアター ワイルからガーシュインへ 前田祐希&佐藤允彦 ジャズ・ライブ(9月24日)

ACM劇場でのジャズ・ライブ! 佐藤允彦のセンスあふれるアレンジ、それに命を吹き込む練達のミュージシャン、その上に余裕綽々と登場する歌姫・前田祐希。ワイルとガーシュインの名曲の数々、お楽しみいただけましたでしょうか。この2人の作曲家が、いかにジャズという音楽にとって「クラシック」な存在か、たっぴり堪能させてくれる一夜でした。企画者・間宮芳生が各曲の裏話を演奏の合間に語り、終わるとエネルギーを充填していたミュージシャンたちが全速で走り出す。あっという間の一夜、「もっと聴きたい!!」というお客様からの熱い声を浴びながら、アンコールのワイル ロスト・イン・ザ・スター がしっかりと歌われライブは幕を閉じたのでした。演奏曲目は「プチ情報」をご覧ください。《矢澤》アンケートから) チラシの「前田祐希さんの歌には引力がある」というのは本当でした(常陸太田市:K.H.さん) 中川さんのフルート最高!ピアノもすごい!! ヴォーカルgood!! ス・ワンドフル ワンダフル!(水戸市:無記名の方) 自然に体がリズムを刻むのがJazzの良さですネ(水戸市:T.H.さん)

1~2. ミト・デラルコ第8回演奏会 3. ソング・シアター



*nettama=ネットワークする猫。タマ。芸術館のコンサートをカナにいろんなところへnettamaします。

Hidden masterpieces?

いやー、いいですねえ、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲。弦楽合奏が堂々と二短調のテーマを奏すると、独奏ヴァイオリンが意表をついてロマンティックに第2主題を奏でてね。え、違うだろうメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲はいきなりヴァイオリンが「タラータラータリタリタリ」だろうって？ いやいや、僕が申し上げたのは有名な「ホ短調」の方じゃなくて、13歳のときにメンデルスゾーンが書いた「二短調」の方。今度、榎本大進さんが水戸室内管弦楽団と共演するほどの曲です。ホ短調のあの、とうとうと流れゆくメランコリーと抒情、終楽章の妖精の輪舞、もちろん信じられないくらいすばらしい。でも、あれに比べると少し肩ひじの張ったところはあるけれど、どうしてどうしてこの「二短調」も素敵な曲ですよ。アイディアがいっぱい詰まっています、13歳でこの曲書いたって、にわかに信じられないよね。

この曲はものすごくスペシャルな例だとは思いますが、聴いて、「名曲の影に“もうひとつの隠れた名曲”あり」だな、とふと思った。大作曲家の「これぞ決定的名曲」の影には、しばしばその作曲家がその名曲を書くずっと前に書いた、同種の隠れた逸品がある。それは往々にして「若書き」と呼ばれ、ときに未完だったりするけれど、大名曲に行き着くまでのかけがえのない第一歩として、なかなか忘れがたいものが多いんじゃないか。

たとえば同じヴァイオリン協奏曲でいえば、ベートーヴェン。1806年に書かれた二長調1曲がもう神々しいばかりの傑作としてそびえ立っているけれど、それに先立つ15年ほど前

20歳になったばかりのベートーヴェンは八長調のヴァイオリン協奏曲を手がけている。これがなかなかどうして、「アレグロ・コン・プリオ」という指定から「おお、ベートーヴェン！」という感じだし、じっさい堂々たる歩みはもし完成していたら「第1番」という名前と呼ばれて不思議じゃない充実ぶりだ。「完成していたら」と書いたのは、この曲は第1楽章の259小節目で未完に終わっているから。でも再現部手前まで完成しているので復元が可能で、なんとクレメールが録音している。演奏時間15分に及ぶ大作だ。ちなみにベートーヴェン、有名な5曲のピアノ協奏曲に先立って、14歳のときにピアノ協奏曲を書いている。ちゃんと最後まで書かれているがピアノ独奏パートしか残されてない。ただ管弦楽指示があるので、やはり復元版が作成されている。ずっと古典派よりの作品だけけど、ピアノ・パートはなかなかテクニカルでびっくりだ。

シューマンにもあった。4曲の交響曲はもちろん傑作だけけど、第1番に先立つ7年前の1833年、ト短調の交響曲(通称「ツヴィッカウ交響曲」)が書かれている。全3楽章の構想だが、完成は第2楽章まで。第1楽章は実際に演奏されて大成功だったそうだ。なかなかシュトルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)な作品でとても魅力的。豊かすぎるファンタジーが最終的に作品としてまとめることをさまたげたのかなあ、と思う。ガーディナーの録音がある。一方、有名なイ短調のピアノ協奏曲(これ自体最終的な完成まで時間がかかった曲だけけど)に先んじた二短調のピアノ協奏曲、というのもあるそうだ。1839年に第1楽章のみ書かれている。うーん、聴いてみたいな。

ブルックナー。9つの大規模な交響曲の前に、彼自身が「第0番」と呼んで番外扱いした二短調交響曲があるのは有名(ただし近年の研究では、実はもっと後に書かれた作品だとか)。これはもう立派なブルックナー作品だが、しかしその前にさらに、通称「第00番」と呼ばれる短調の交響曲がある。真正銘の習作で、少しもったりしたメンデルスゾーンのような(ブルックナーさんすみません)。でもここからあの大交響曲への道のりがはじまったんだなあ、と思う。

シベリウス。7つの不朽の交響曲があるが(第8番の謎についてはかつてこの欄でも取り上げましたね)第1番に先立つこと6年、クレルヴォ交響曲という番外の交響曲がある。独唱と合唱が加わり、フィンランドの神話『カレワラ』をベースにした壮大な物語を描く、カンタータのような交響詩のような大作だ。大成功したがシベリウスは「未熟だ」として死ぬまで再演も出版も許さなかった。未熟だなんて、そんなことないですシベリウスさん。

あとドヴォルジャークの「イ長調」チェロ協奏曲とか、プロコフィエフの古典交響曲に先立つ「シンフォニエッタ」とかまだまだいろいろあるのだけれど、そろそろ紙数が尽きるので最後にひとつだけ。マーラーが巨人の前に交響曲を書いていたってご存知？ 彼自身の手によって破棄されてしまったそうだけれど、その名は「北欧交響曲」。すごく聴いてみたいであ...。作曲者本人はいやかかもしれないけれど。

これも隠れた「名曲」ベートーヴェンのピアノ協奏曲第6番。実は本人が自分のヴァイオリン協奏曲をピアノ用に編曲したものの、ムストネの演奏。



プチ情報 速 達

9月24日に行われた『ソング・シアター ワイルからガーシュインへ 前田祐希&佐藤允彦 ジャズ・ライブ』演奏曲目をご紹介します。【第1部】クルト・ワイル 1) 三文オペラ 序曲 2)スピーク・ロウ 3)ビルバオ・ソング 4)雨が降る 5)アラバマ・ソング 6)セプテンバー・ソング 7)ユーカリ 8)マック・ザ・ナイフ(メキ・メッサーの殺人物語大道歌) 【第2部】ジョージ・ガーシュイン 1)誰が守ってくれるの 2)うまくいったらいいね 3)スワニー 4)サマータイム 5)ス・ワンドフル 6)パイ・ストラウス 7)いつの頃から 8)アイ・ガット・リズム 【アンコール】ワイル:ロスト・イン・ザ・スター 水戸室内管弦楽団メンバー 店村真積(ヴァイオリン)とATMアンサンブルメンバー 原田幸一郎(ヴァイオリン)、毛利伯郎(チェロ)が共演した室内楽のCDがしまし

た。ピアノの大須賀恵理と共演した「ピアノ・チェンバー・コンサート2005」, 曲目はブラームスのピアノ四重奏曲第1番、ヴァイオリン・ソナタ第2番、シューマンのピアノ四重奏曲です。(SPEX OVCL00018、2枚組) 同じくATMアンサンブルの小林美恵(ヴァイオリン)のニュー・アルバムも登場。ギタリスト、尾尻雅弘との共演によるスペイン名曲選『カルメン・ファンタジー』です。(EXTON OVCL-00213) ミト・デラルコメンバー、寺神戸 亮(ヴァイオリン)がフォルテピアノのボヤン・ヴォデニチャロフと共演したベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全集の録音が、8年かけて完結しました。最終巻は クロイツェル と第10番の組み合わせ(アリアーレCOCQ84045)。全集ボックスセットも出ました(COCQ94046~49、4枚組)。

